

井上浩一著「ビザンツ皇妃列伝：
憧れの都に咲いた花」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000270

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



井上浩一著

『ビザンツ皇妃列伝』

— 憧れの都に咲いた花 —

最近、書店の歴史コーナーの棚を覗くと、ビザンツ帝国、オスマン・トルコ帝国、ハプスブルク朝など、既に滅び去って久しい国家を扱った文献が、それらの故地を訪ねるビジュアル・ブックの類を含めて何冊も並んでいる。多くの民族が入り混じって暮らす多様な国土をひとりの皇帝が統べる古めかしい帝国の記憶は、民族自決の原則の下に近代国民国家を建設し、それに伴う数々の軋轢を体験してきた二十世紀末に生きる我々にとって、ある種の郷愁を感じさせる存在になっているのだろうか。こうした流行がたとえ一過性のものであったとしても、この間に幾つかの貴重な業績が公刊されたことは素直に喜んでいいだろう。

ここに紹介する井上浩一氏の新著は、最近出たビザンツ関係の文献のなかでも、赤

松章氏の美しい写真と益田朋幸氏の味わい深い文章が共鳴しあう『ビザンティン美術への旅』（平凡社）と並んで、その最も重要な成果と言うべきものだ。

本書はタイトルにもあるように、ビザンツ皇妃たちの伝記集である。この主題を選んだ理由として著者は、皇帝を中心にした「ビザンツ史を見なおすひとつの試みとして皇帝の妃に着目した」と語っている（二四五頁）。皇帝中心史観を克服する気なら、なにも皇帝と表裏一体の関係にある皇妃を取り上げなくともよかったのではないか、女性を扱うなら、市井に生きる庶民の女性、地方貴族の子女、聖者伝に現われる女性聖者など、多様な女性の姿を揃い上げる手法もあったのではないかと訝る読者もいるかもしれない。しかし著者の狙いのひとつは、幾つもの伝記を読み継ぐなかで、ビザンツ帝国の興亡の歴史を跡付けることにあるのであり、その点で定点観測の場としては、国家権力の中核に近い皇妃の座ほど好適なものはないことを指摘しておく必要があるだろう。

次に本書に収められた八人の皇妃たちの横顔を、著者の言葉を援用しつつ紹介しよう。

ひとりめはアテナイス・エウドキア。アテナイの哲学者の娘として生まれ、テオドシウス二世（キリスト教を国教化したテオドシウス大帝の孫）の妃になった彼女は、古代から中世へと時代が移りゆくなかで生涯を送る。

次に登場するのは、ローマ帝国再興を夢見たユスティニアヌス帝の妃テオドラである。本書の表紙カバーにも採られたラヴェンナの聖ヴィターレ寺院のモザイクからその容貌を知られる踊り子上がりの皇后を、プロコピオスは『秘史』のなかで酷評している。

七世紀、相次ぐ外敵の侵襲に、帝国は危機の時代に突入する。この国難に果敢に挑んだ皇帝ヘラクレイオスの再婚の相手は彼自身の姪マルティナだった。二人は常に近親相姦の謗りを浴び、皇帝の死後、彼女には悲惨な運命が待ち受けていた。

八世紀後半の皇帝レオン四世の妃エイレネーは、むしろ実の息子を廃してビザンツ史上初の女帝になったことで有名である。イコノクラスムを終結させたことで聖人にも列せられている彼女は、権力の魔性に取

り憑かれた女性でもあった。

十世紀以降、マケドニア朝の下、ビザンツ帝国は新たな繁栄の時代に入るが、同王朝の正嫡ロマノス二世の妃になったテオファノは、夫の死後、小アジアに勃興した大貴族家門の二人の代表者の権力闘争に翻弄されてゆく。

ここまでで登場した皇妃の大多数が無名の家系の出だったのに対し、六人目のエイレーネー・ドゥーカイナは帝国有数の名門貴族家門の出身だった。彼女が皇妃の地位を占めたことは、十一世紀末に貴族勢力の結集のうえに国家再建の基盤を築こうとしたコムネノス朝の国家体制を象徴するものと言えるだろう。

コムネノス朝の時代は十字軍運動に代表される西欧勢力の東地中海進出、発展の時代でもあった。フランス王ルイ七世の娘アニェスは幼くしてビザンツ皇帝アレクシオス二世の花嫁に迎えられるが、後に第四回十字軍による第二の祖国滅亡に立ち会うことになる。

その後、約半世紀を経てビザンツ帝国は復活するが、もはや国運の頹勢は押しとどめようがない。本書の掉尾を飾るヘレネ・

パライオロギナは、セルビアから興入れし、帝国最後の皇帝の母となった人物である。

以上の要約から、本書を通読すれば、波瀾に富んだビザンツ帝国の歴史の主要も同時に把握できる仕組みになっていることがわかるだろう。著者自身、「初めてビザンツ世界の扉を叩く方にも、この世界の魅力を理解してもらえよう叙述にも工夫している」(九頁)と語ることく、文章は平易で、わかりやすい。ただ、本書の副題になっている「憧れの都に咲いた花」をはじめ、「大輪の花」、「妖しい花」など、「花」の比喩を多用している点は、美女を形容する常套句であるとはいえ、男に愛でられ、觀賞される受動的存在が連想されて、少し気になった。

ともあれ、本書の主人公たちに注がれる著者の眼差しはその人柄そのままに慈愛に満ちて温かい。それは、たとえて言えば、裁く神の視線ではなく、赦す神のそれだ。我が国でも多くの訳が出ているフランスの中世史家レジヌ・ペルヌーの語り口を思い出した読者も少なくあるまい。皇妃たちの生涯には凄惨な挿話もちりばめられているが、それらも、彼女たちが懸命に運命に

立ち向かってゆくなかでの出来事として、概ね好意的に物語られている。そうしたなかでも、第三章でヘラクレイオス帝の十年にわたる「謎の無気力」をめぐるくだりで、最初の妻エウドキアの死にその原因を求め、マルティナとの再婚が皇帝に精気を蘇らせたのだ、という主張は、関係史料の乏しいなか、そのあまりにロマンティックな結論とも相俟って、ここまで大胆に踏み込んでよいものか、と心配になるほどである。ヘラクレイオス没後の一族内の権力闘争も、当人たちは互いに善意を抱きながら、時代の奔流に押し流された結果として描き出すなど、こうした、登場人物の大半が善人で占められる舞台上、なにか物足りなさを覚えるとするれば、それはその人が、権謀術数と宮廷陰謀の渦巻くビザンツ帝国、という固定観念に既に掬取られている証左なのかもしれない。

本稿の準備中、著者から、本書一七〇頁に、皇帝イサキオス一世が弟ヨハネスをカエサル(副皇帝)に指名した、という記述は記憶違いによるもので、事実上クロペラテス(皇族相当の爵位)への叙任である旨、通知を受けた。著者の意向に添い、この場

を出りて、右のよりに訂正しておく。

(A5判 二四六頁 一九九六年三月)

筑摩書房 二四〇〇円

(根津由喜夫 富山大学助教授)